

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
- ◎良質たい肥の生産・利用で、自給飼料の安定確保に努めよう。

乳用牛

◇ 子牛及び育成牛の飼育管理

1 出生時

- (1) 子牛は、生まれたらすぐに清潔で乾いた稲わらなどで体を拭き、へその緒を紙コップに入れた希ヨードチンキ等に浸し消毒する。
分娩直後、母牛が子牛をなめる行動は、子牛の濡れた体が早く乾くだけでなく、呼吸や血液循環を促す効果がある。
- (2) 初乳は、生後4時間以内に2リットル以上、さらに12時間以内に2Lリットルを飲ませる。母牛が血乳や乳房炎等の場合は、凍結初乳や初乳製剤を使用する。子牛が初乳を飲めない場合は、ストマックチューブを用いて強制的に哺乳する必要があるが、その際は、子牛が動いて食道や喉を傷つけないように、両足で挟みこむなどしてしっかり保定する。
- (3) 初乳給与後は、乾燥した敷料を敷き詰めた子牛ペン又はカーフハッチに個別に収容し、冷気が直接当たらないようにする。出生直後は、気温が15℃以下になると寒冷ストレスを受けることから、必要に応じて暖房器具や保温ジャケットを利用する。
- (4) 生後3日程度経過し、順調に哺乳できるようになれば、スターター（人工乳）を給与し、ルーメン絨毛の発達を促す。このとき、スターターを飼料と認識させるために、3日間程度は人為的に口に入れて味を覚えさせる。

2 哺乳時

- (1) 哺乳は、朝夕2回に分けて行う。1日当たりの哺乳量は4リットルが一般的であるが、生後3週目以降は要求量が高まるため、徐々に増やしてもよい。
- (2) スターターの採食量が、3日連続で1日当たり1kg以上になったら離乳させる。また、生後5週目の段階でスターターの食い込みが悪い場合は、ミルクを減らして採食を促す。
水分補給は、スターターを十分に食べさせるために重要であるが、ミルクと水（ぬるま湯）の同時摂取は、消化吸收の妨げとなるため、ミルク給与後30分以上の間隔を空けてからぬるま湯を与える。
- (3) 哺乳期間は、下痢の発生を防ぐため、乾燥した敷料を十分に補充して腹が冷えないようにする。下痢の場合はミルクの給与量を減らすとともに、脱水症状を防ぐため電解質製剤をお湯で溶かし給与する。電解質製剤は、溶かすお湯の量が多すぎたり、少なすぎたりすると逆効果になることもあるので、製品に記載された用法用量を守る。

3 育成時

- (1) 離乳後は、月齢の近い子牛同士で群飼する。疾病の予防と良好な発育を促すため、清潔で換気の良い畜舎で飼育し、良質乾草を自由採食させる。
- (2) 濃厚飼料は、タンパク質含量の高い育成用配合飼料を給与する。下痢を防ぐため、給与量は徐々に増やす。1日当たりの給与量は、2～3 kgを目安とし、朝夕2回に分けて給与する。
- (3) 育成牛の授精の目安は月齢ではなく、体重・体高（体重 350 kg・体高 125 cm以上）を重視する。初産分娩 24 か月齢以内の目標を達成させるため、12～14 か月齢で初回授精を実施出来るよう、十分に飼料を食い込ませ発育させる。

4 放牧時

- (1) 放牧開始前には外気や青草に慣らすため、パドック等を利用して放牧馴致を行う。また、夏期の放牧では、直射日光を避けるスペースと飲水場所を確保する。
- (2) 公共施設に育成牛を預託する場合は、伝染性呼吸器病の予防のため、預託開始の3週間前までにワクチンを接種する。

肉用牛

◇放牧に向けた飼育管理

1 放牧馴致

放牧1か月前から徐々に運動場に出して日光浴をさせるとともに、外気に馴らしたり、青草を毎日少量でも給与し、第1胃内の状態を放牧時の環境に近づける。

2 病気の予防

舎飼期に疾病に罹患している場合は、早期に治療し、回復させてから放牧する。ワクチンは、繁殖雌牛には異常産予防のための「アカバネ病ワクチン」や、気腫疽等予防のための「牛嫌気性菌3種ワクチン」、子牛には呼吸器病予防のための「牛呼吸器病混合ワクチン」を適期に接種する。

3 削蹄

舎飼期は運動量が少ないこともあり、蹄が比較的早く伸びることから、削蹄してから放牧する。

豚

◇ 衛生対策

- 1 豚流行性下痢については、冬季に入ってから県外において散発的な発生がみられており、引き続き消毒等による発生予防やまん延防止対策を徹底する。
- 2 飼育環境の悪化は、疾病発生の原因となるので、舎内の換気や室温の急変には十分注意する。また、過密飼育はストレスを誘発するので、発育に応じた適正密度を保つようにする。
- 3 豚舎への病原菌やウイルスの侵入を防ぐため、踏込消毒槽を設置し、履物や車両の消

毒を適切に行う。消毒剤の効果は、有機物の混入や直射日光により低下するので、2～3日ごとに交換する。

- 4 豚舎や豚房のふん尿・有機物の汚れは、水洗あるいはスチームクリーナーにより十分に洗い落とした後、消毒と石灰散布を徹底する。
- 5 豚の健康状態の把握と異常の早期発見のため、ふんの状態や目ヤニの有無などを毎日観察し、異常がある場合は、速やかに獣医師の診断や治療を受ける。

鶏

◇ 高病原性鳥インフルエンザ防疫対策

- 1 高病原性鳥インフルエンザウィルスの感染を防ぐため、鶏舎の金網の破れや壁の破損等は確実に補修し、野鳥や野生動物等が舎内に侵入しないようにする。
- 2 鶏舎内の作業は、専用の作業服と長靴を使用し、出入りの際は消毒や着替えを徹底する。
- 3 消毒には、高病原性鳥インフルエンザに効果のある逆性石鹼などの消毒液や消石灰を使用する。
- 4 外部からの人や車がやむを得ず出入りする場合は、入念な消毒を行う。
- 5 飼育している鶏を入念に観察し、異常が見られた場合は、直ちに最寄りの家畜保健衛生所に連絡する。

◇ 青森シャモロックの飼育計画

- 1 青森シャモロックの飼育に必要な鶏舎面積は、飼育密度を1㎡当たり5羽以下、鶏舎の使用期間を飼育に120日、消毒に30日の計150日として算定する。
- 2 ビニールハウス利用の鶏舎では、丈夫な42.7mm以上のパイプを使用する。
- 3 鶏舎の床面は、ネズミなどの野生動物侵入防止や衛生対策のため、厚さ10cm以上のコンクリート製とする。
- 4 雄は100日齢、雌は120日齢を目途に出荷する。
- 5 出荷時期は、販売先との契約等により決定するが、収容鶏舎や入雛時期の調整により、自分の経営に適したローテーションは、下の式を参考に計画する。

《参考》

- ① 入雛羽数＝年間出荷計画羽数÷育成率（98%）÷商品化率（95%）
- ② 必要鶏舎面積（㎡）＝入雛羽数÷5羽÷2回
- ③ 棟数＝必要鶏舎面積（㎡）÷一棟あたり鶏舎面積（㎡）

草地・飼料作物

◇ 草地の適切な施肥管理

- 1 採草地
 - （1）早春追肥は、消雪後又は牧草の萌芽前に速やかに行う。
 - （2）施肥量及び施肥配分は、年間目標収量及び刈取回数に応じて表1及び表2のとおり

とする。土壌中の交換性カリ含量が 18 mg/100 g を超える場合はカリの施用量を減らす。
 (3) 牛尿を追肥として施用する場合は、牛尿の EC (電気伝導度) を測定し、化学肥料代替量推定値 (表 3) により化学肥料を減らす。

表 1 オーチャードグラス主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10 a)	年間成分施用量(kg/10 a)				刈取回数	施肥配分 (早春：各刈取後)
	窒素	リン酸	カリ	苦土		
5	15	10	10	10	3	5 : 3 : 2
6	20	15	15	10	3	5 : 3 : 2
					4	4 : 3 : 2 : 1
7	25	17	17	10	4	4 : 3 : 2 : 1

表 2 チモシー主体草地の目標収量別施肥基準

年間目標収量 (生草 t/10 a)	年間成分施用量(kg/10 a)				刈取回数	施肥配分 (早春：各刈取後)
	窒素	リン酸	カリ	苦土		
4~5	10	6.7	6.7	10	2	4 : 1 または 3 : 1
					3	5 : 3 : 2
6	16	10.7	10.7	10	3	5 : 3 : 2

表 3 EC による牛尿 1 m³中の化学肥料代替量推定値

	EC (mS/cm、25°C補正值)										
	0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
窒素 (kg)	0.19	0.27	0.43	0.65	0.95	1.31	1.74	2.25	2.82	3.47	4.18
カリ (kg)	0.49	1.11	1.73	2.34	2.96	3.58	4.20	4.81	5.43	6.05	6.67

2 放牧草地

収量の季節平準化をねらいとした施肥を行う。施肥量は表 4 のとおりとする。

表 4 放牧草地の目標収量別施肥基準 (標高 400m以下、スプリングフラッシュ抑制草地)

年間目標収量 (生草 t/10 a)	年間成分施用量(kg/10 a)				施肥時期及び施肥配分
	窒素	リン酸	カリ	苦土	
4	10	10	2.5	10	・年 2 回施肥の場合、6 月上～中旬に 6 割、8 月上～中旬に 4 割 ・年 3 回施肥の場合、早春に 2 割、6 月中～下旬に 5 割、8 月上～中旬に 3 割
5	15	10	4	10	

◇ 牧草地におけるムギダニの早期発見と防除

- 1 ムギダニは、4 月中旬頃から活動期を迎える。ムギダニの被害にあった牧草は、葉が次第に黄変し、多発した場合は枯死するので、早期発見と防除に努める。
- 2 ムギダニの発生が著しい場合は、スミチオン乳剤の 1,000 倍液を散布し防除する。なお、散布後 2 週間は採草、放牧を避ける。

◇ サイレージ用とうもろこし畑の準備

1 適品種の選定と種子の確保

本県の奨励品種（表 5）の中から早晩性や作付体系を考慮し、栽培期間内で黄熟期に達するものを選択する。

表 5 サイレージ用とうもろこしの奨励品種

品種名（系統名）	早晩性	適当な栽植密度
おおぞら（北交 55 号）	極早生	8,000 本/10a
パイオニア 100 日（P9400）	早生	7,000 本/10a
パイオニア 106 日（36B08）	早生	7,000 本/10a
ロイヤルデント TH472（TH472）※	早生	7,000 本/10a
スノーデント 110（LG3520）	早生	7,000 本/10a
スノーデント 108（LG3490）	早生	7,000 本/10a
パイオニア 108 日（34N84）	早生	7,000 本/10a
北交 65 号（北交 65 号）	早生	7,000 本/10a
ゴールドデント KD550（KE8500A）	早生	7,000 本/10a
きみまる（北交 72 号）	早生	7,000 本/10a
パイオニア 110 日（P0640）	早生	7,000 本/10a
パイオニア 115 日（P1690）	中生	6,000 本/10a
パイオニア 118 日（P2088）	中生	6,000 本/10a
クミアイデント 118N（GN1645）	晩生	6,000 本/10a
サイレージコーン NS127（KE7750）	晩生	6,000 本/10a
パイオニア 126 日（32F27）	晩生	6,000 本/10a
タカネフドウ（長交 C980）	晩生	6,000 本/10a

※すす紋病の前歴がない圃場限定

2 ほ場の準備

- （1）完熟した堆肥を 4～8 t/10 a 施用し、プラウ等により土壌とよく混ぜる。
- （2）砕土及び整地の良否は、播種精度、出芽揃い、除草剤の効果等に影響するので、ていねいに行う。

3 土壌改良資材の施用

- （1）石灰質資材は、土壌診断に基づき pH6.0～6.5 の酸性矯正量を施用する。
- （2）リン酸質資材は、堆肥からのリン酸供給量が 10 kg/10 a 以上あれば施用しなくてもよい。